岐阜大学機関リポジトリ
Gifu University Institutional Repository

ノートルダム清心女子大学附属図書館蔵黒川文庫本『長明無明抄』翻刻

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2021-10-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 弓削, 繁 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12099/44217

ノートルダム清心女子大学附属図書館蔵黒川文庫本『長明無名抄』翻刻

弓削　繁

解題

『無名抄』の伝本は比較的多く、『国書総目録』『古典籍総合目録』に合わせて約五〇の写本が、また国文学研究資料館のデータベース「日本古典籍総合目録」に約三五の写本が載せられており、板本も数種が知られる。そのうち、主要なものとしては次のような伝本が挙げられる。

1、呉文炳旧蔵本（天理図書館蔵）
　『国書遺芳』・日本古典全書『方丈記』・歌論歌学集成第七巻、所収

2、梅沢記念館蔵本（東京国立博物館蔵。重要文化財）
　複刻日本古典文学館・『鴨長明全集』、所収

3、弘安七年本（宮内庁書陵部蔵松岡本・簗瀬一雄氏蔵本等）
　『無名抄全講』所収

4、天理図書館蔵本（竹柏園文庫旧蔵本）
　日本歌学大系第三巻・天理図書館善本叢書44、所収。

5、蓬左文庫蔵本

6、静嘉堂文庫蔵本
　日本古典文学大系65『歌論集能楽論集』所収

7、板本
　和泉書院影印叢刊48・三弥井書店『無名抄』、所収

8、群書類従本

このほかに小川寿一氏蔵の弘安二年本があり、書写年代の古さから注目されるが、未紹介、未見である。

さて、ここに翻刻するノートルダム清心女子大学附属図書館蔵黒川文庫本『長明無名抄』は、黒川家の厖大な蔵書の一冊であり、春村から真頼、真道へと受け継がれてきたものである。表題の下に「飛鳥井栄雅筆」とあり、裏表紙見返しに「右此一帖ハ飛鳥井栄雅卿筆也」とあるのに従えば、室町中期の歌人で、入木道の飛

鳥井流を開いた雅親の筆写ということになる。

本文は、諸本と突き合わせてみると、夙に久保田淳氏が複刻日本古典文学館の解説で「十分調査してはいないが、ノートルダム清心女子大学蔵黒川文庫本伝飛鳥井栄雅筆長明無名抄は、この本に近いように思われる」と指摘されているとおり、梅沢記念館蔵本と極めて近いことが知られる。

翻刻者は一色直朝（月庵）の手になる『月庵酔醒記』の『無名抄』依拠記事を検討する過程でこの本に注目したのであるが（『酔醒記』の本文は呉本と近似することが明らかになった）、これを機にノートルダム清心女子大学当局のご高配を得て翻刻を試みることにした次第である。

はじめに、書誌について摘記しておくと、架蔵番号、G一二九、一ー一、黒川本。表紙は渋引き無地。寸法、縦二二・五糎、横一六・六糎。斐紙、列帖装。墨付、七一丁。遊紙、なし。漢字、平仮名交じり書写で、一面一二行。なお、末尾の七〇丁表裏と七一丁表は別紙、別筆による補写である（補写部分は、梅沢本にある「ヲノトハイハジトイフ事」の標目を欠き、梅沢本にない「とこねの事」という標目を有するなど、それまでの本文に比してやや梅沢本から離れており、別系統の本によったものと推測される）。外題は表紙左上に「長明無名抄　飛鳥井栄雅筆」と打付け書きする。内題、目次はないが、各記事のはじめに朱墨で標目が入れられており、部分的に朱墨による補入、校合もみられる。

裏表紙見返しに「右此一帖ハ飛鳥井栄雅卿筆也」という識語があり、巻頭に黒川真頼・黒川真道・黒川真前の長方朱印と未判読の方朱印一つが捺されている。

なお、本書には一箇所錯簡があって注意される。すなわち、二二丁表裏の一葉は本来三二丁裏の後に続くべきものである。改装の際の綴じ違いによるものであろう。

翻刻凡例

1、本稿はノートルダム清心女子大学附属図書館蔵黒川文庫本『長明無名抄』を出来る限り底本に忠実に翻刻したものである。
2、底本は続け書きであるが、適宜段落に区切り、改行した。
3、底本には濁点・句読点・引用符等はないが、通読の便を考慮してこれらを施した。
4、朱墨による記事標目は、〔　〕に入れて記した。
5、底本には朱墨書入・朱墨校が見られるが、これらを尊重して翻刻した。
6、漢字は、異体字・略体字など、いずれも原則として通行のものを用いた。

7、反復記号「ゝ」「〳〵」は底本のままとした。
8、底本の不鮮明部分は、□で示した。
9、底本の改丁と表裏を、末尾に」を付し、（1オ）のように示した。

長明無名抄　飛鳥井栄雅筆（外題）

〔題心〕

歌は題の心をよく心うべきなり。俊頼の髄脳といふ物にぞしるして侍める。かならずまはしてよむべき文字、中〳〵まはしてはわろくきこゆる文字あり。かならずしもよみすへねども、をのづからしらるゝ文字もあり。いはゆる暁天落花・雲間郭公・海上明月、是らのごとくは、第二の文字かならずしもよまず、みなしもの題をよむに具してきこゆる文字あり。これらはをしへならふべき事にあらず。よく心得つれば、その題をみるにあらはなり。又、題の歌はかならず心ざしをふかくよむべし。たとへば、いはひにはかぎりなくひさしき心をいひ、恋にはわりなくあさからぬよしをよみ、もしは命にかへて」（1オ）花をおしみ、家路を忘れてもみぢをたづねんごとく、その物に心ざしをふかくよむべきを、古集の歌どものさしもみえぬは、歌ざまのよろしきによりて、その難をゆるせるなり。もろ〳〵の難ある歌、此会尺によりてえらびいるゝ、つねのことなり。されど、かれをば例とすべからず。いかにも歌合などに、おなじほどなるにとりては、今すこし題をふかくおもへるを、まさると定也。たとへば、説法する人の、その仏にむかひてよく讃嘆するがごとし。

たゞし、題をばかならずもてなすべきぞとて、ふるくよまぬほどの事をば心すべし。たとへば、郭公などば、山野をたづねありきてきく心をよむ。鶯ごとくは、ま」（1ウ）つ心をばよめども、たづねてきくよしはいとよまず。又、鹿のねなどは聞に物心ぼそくあはれなるよしをばよめども、まつよしをばいともいはず。かやうの事、ことなる秀句などなくは、かならずさるべし。又、桜をばたづぬれど、柳をばたづねず。初雪などをば、また花をば命にかへておしむなどいへども、紅葉をばさほどにはおしまず。これらをば心えぬは故実をしらぬやうなれば、よく〳〵古歌などをもおもひときて、歌のほどにしたがひはからふべき也。

〔連ケガラ善悪アル事〕

歌はたゞおなじこと葉なれど、つゞけがら、いひがらにて」（2オ）よくもきこゆるなり。かの友則が歌に、「ともまどはせる千鳥なくなり」といへる、いふにきこゆるを、おなじ古今の恋の歌の中に、「恋しきにわびて玉しるまどひなば」ともいひ、又「身のまどふだにしられざるらん」などいへるは、たゞおなじこ

と葉なれど、おびたゝしくきこゆ。是はみなつゞけがらなり。されば、古歌にたしかにしか〳〵あなりなど証をいだすことは、やうによるべし。その歌にとりて善悪あるべきゆへ也。

曽根好忠が歌に、

はりまなるしかまのかぢのあながちに人をこひしとおもふころかな」（2ウ）

「あながち」といふことばゝ、うちまかせて歌によむべしともおぼえぬ事ぞかし。しかあれど、「しかまにそむる」とつゞきて、わざともえんにやさしくきこゆ也。古今の歌に、

春がすみたてるやいづこみよしのゝよしのゝ山に雪はふりつゝ

是はいとめでたき歌也。なかにも、「たてるやいづこ」といへること葉すぐれていふなるを、ある人の社頭の菊といふ題をよみ侍しに、

神がきにたてるやきくのえだたわにたがたむけたる花のしらゆふ」（3オ）

おなじく「たてるや」とよみたれど、これはわざとも詞もきかず、てづゝげに侍り。

〔隔海路論〕

或所にて歌合し侍りし時、海路をへだつる恋といふ題に歌はわすれたり、つくしなる人の恋しきよしをよめりしに、かたへはこれを難ず。「さうなり。つくしは海をへだてたれば、おもひつゞくるにはあることなれど、かちよりゆく人のためには、もじのせきまでおほくの山野をすぎて、たゞいさゝか海をわたるべければ、題のほいもなくすこぶる広涼なる方もあり。たとへば、みちの国なる人をこふるよしをよみては、この」（3ウ）歌ひとつにて、野をへだつる恋にも山をへだつる題にも、もしは里をへだて河をへだつるにももちゐんとやする。題の歌はさもときこゆるこそよけれ。あまりざびろ也」と難ず。或云、「歌はさのみこそよめ。まさしく海をだにへだてゝは、かならずかのいそなる人をこのうみまで見わたすべきことかは。あまりの難なり」とあらそひあへりしを、その座に先達あまた侍りしもかたゞ〳〵わかれて、おほきなる論にてなん侍りし。されど、心にくきほどの人、おほくは、難をば「今すこしいはれたり」とぞ定侍りし。」（4オ）

〔我与人〕

又おなじ所にて、こくなはといひし女房、夏を契と云題に、

おしむべきはるをば人にいとはせてそらだのめにやならむとすらむ

とよめりしを、「よろし」など人〴〵さだめ侍しほどに、ある人のいはく、「『春をば人に』といへる、すこしおぼつかなからむ。たゞ『春をばわれに』といひたらば、たしかにてままさりなんか

し」といふ。これ同ずる人おほく侍しを、俊恵きゝて、「むげに心をとりせらるゝ事をものたまふかな。『人に』といひたりとても、他人とやはおもひたどるべき。『われに』といひては、うたてことのほかにしなゝくきこゆる物を。歌は花麗をさきとす。人をばしらず、」（4ウ）をのれは、たとひ難ありとも『人に』とよまん」とぞ申侍りし。

〔晴歌可見合人事〕

はれの歌はかならず人にみせあはすべきなり。我心ひとつにて、あやまりあるべし。予そのかみ、たかまつの女院のきたおもてに菊あはせといふこと侍りしとき、恋の歌に、

人しれぬなみだの河のせをはやみくづれにけりな人めつゝみは

とよめりしを、いまだはれの歌などよみなれぬほどにて、勝命入道にみせあはせ侍しかば、「此歌、おほきなる難あり。みかど・きさきのかくれ給をば、『崩ず』」（5オ）といふ。その文字をば、『くづる』とよむなり。いかでか院中にてよまん歌に、このことばすうべき」と申侍りしかば、あらぬ歌をいだしてやみにき。そのゝちほどなく女院かくれおはしましにき。この歌のさとしとぞ、さたせられ侍らまし。

〔無名大将事〕

九条殿いまだ右大臣と申時、人〻に百首よませらるゝ事侍き。そのたび、いみじき人〻ひが事よみて、はてには異名さへつき給にき。ちかくの徳大寺の左大臣は、無明のさけを「名をなきさけ」とよみ給へりしかば、「なゝしの大将」といはれ、五条の三位入道は、この道の長者にいます、しかれど、ふじのなるさわ」（5ウ）を「ふじのなるさ」とよみて、「なるさの入道・名なしの大将」とつがひて人にいはれ給ひしかば、いみじきこの道のいこむにてなむ侍しを、をの〳〵これほどのこと、しり給はぬにはあらじを、おもひわすれ給へりけるにこそ。

〔仲綱歌イヤシキ詞ヲヨム事〕

おなじたびの百首に、いづのかみ仲綱の歌に、「ならはしがほ」などよみたりしをば、大弐入道きゝて、「かやうの事などよまん人をば、百千の秀歌よみたりとも、いかゞ歌よみとはいはん。むげにうたてきことなり」とこそ申されけれ。これらはみな、人にみせあはせぬあやまりどもなり。」（6オ）

〔頼政歌俊恵撰事〕

建春門女院の殿上の歌合に、関路落葉といふ題に、頼政卿歌に、

みやこにはまだあを葉にてみしかどももみぢゝりしくしらかはのせき

とよまれて侍りしを、そのたびこの題の歌をあまたよみて、当日

までおもひわづらひて、俊恵をよびてみせられければ、「此歌はかの能因が『秋風ぞふくしら河のせき』といふ歌ににて侍り。されど、これはいでばへすべき歌なり。かの歌ならねど、かくもとりなしてんと、へしげによめるとこそみえたれ。にたりとて難とすべきさまにはあらず」とはからひければ、」（6ウ）今くるまさしよせてのられけるとき、「貴坊のはからひを信じて、さらば是をいだすべきにこそ。後のとがはかけ申べし」といひかけて出られにけり。そのたび此歌おもひのごとく出ばへしてかちにければ、かへりてすなはち、よろこびいひつかはしたりけるとぞ。「みる所ありてしか申たりしかど、勝負きかざりしほどは、あひなくよそにてむねつぶれ侍しに、いみじき高名したりとなん心ばかりはおぼえ侍りし」とぞ俊恵かたり侍りし。

おなじたび、水鳥ちかくなるといふ題に、同人、

子をおもふにほのうきすのゆられきて」（7オ）すてじとすれやみがくれもせぬ

〔ニホノウキス〕

「此歌めづらし」とてかちにき。祐盛法師、これをみておほきに難云、「にほのうきすのやうをえしられぬにこそ。かのうきすは、ゆられありくべき物にあらず。海のしほはみちひる物なれば、それをしりて、にほのすをくふには、あしのくきをなかにこめて、しかもかれをばくつろげて、めぐりにくひたれば、しほみてばかみへあがり、しほひればしたがひてくだる也。ひとへにゆられありかんには、風ふかばいづくともなくゆられ出て、おほなみにもくだかれ、人にもとられぬべし。されど、その座にしれる人のなかりけるにこそ、かちにさだめられに」（7ウ）ければ、いふかひなし」とぞ申侍りし。

〔コノモカノモノ論〕

二条院和歌このませおはしましける時、をかざきの三位、御じどくにて候はれけるに、このみちのきこえたかきによりて、清輔朝臣とめされて殿上に候けり。いみじき面目なりけるを、ある時の御会に、清輔いづれの山のとか、「このもかのも」といふことをよまれたりければ、三位これを難じていはく、「つくば山にこそ『このもかのも』とはよめ、おほかたの山ごとにいふべき事にはあらず」と難ぜられければ、清輔申ていはく、「つくば山までは申べきならず。河などにもよみ侍べきにこそ」とつぶやきければ、三位あざわらひて、「証歌をたて」（8オ）まつれ」と申されけるに、清輔のいはく、「大井河の会に、みつねが序かける時、『大井河のこのもかのも』とかける事まさしく侍る物を」といひ出たりければ、諸人くちをとぢてやみにけり。荒涼に物をば難ずまじきことなり。

いし河やせみのをがはのきよければ月もながれをたづねてぞすむ

〔セミノヲ川ノ事〕

とよみて侍りしを、判者にて師光入道、「かゝる河やはある」とて、まけになり侍にき。おもふ所ありてよみて侍しかど、かくなりにしかば、いぶかしくおぼえ侍し程に、「そのたびの判者すべて心えぬこと」(8ウ)おほかり」とて、又あらためて顕昭法師に判せさせ侍りし時、此歌の所に判していはく、「いし河せ[み]のをがは、いともきゝをよび侍らず。たゞし、おかしくつゞけたり。かゝる河などの侍にや。所のものにたづねてさだむべし」とて、ことをきらず。後に顕昭にあひたりし時、此事かたりいでゝ、「是はかも河の異名なり。当社のえんぎに侍り」と申しかば、おどろきて、「かしこくぞおぢて難ぜず侍ける。さりとも顕昭等がきゝをよばぬ名所あらむやはとおもひて、やゝもせば難じつべくおぼえ侍しかど、たれが歌とはしらねど歌ざまのよろしくみえしかば、所をきてさやうに申て」(9オ)侍りしなり。これすでに老のくう也」となむ申侍し。

そのゝち、この事をきゝて、祢宜祐兼おほきに難[じ]侍き。「かゝ様の事は、いみじからむはれの会、もしは国王・大臣などの御所などにてこそよまめ。かゝるけ事によみたる、無念なることなり」と申侍しほどに、隆信朝臣此河をよむ。又顕昭法師、左大将家の百首の歌合のとき、これをよむ。祐兼云、「さればこそ、われいみじくよみいだされたりとおもはれたれど、代のすゑには、いづれかさきなりけん、人はいかでかしらむ。なにとなくまぎれてやみぬべかめり」とほいながり侍しを、新古今えらばれし時、この歌いれ」(9ウ)られたり。いと人もしらぬことなるを、とり申人などの侍けるにやと。すべてこのたびの集に十首入て侍り。これ過分の面目なるうちにも、この歌の入て侍が、生死の余執ともなるばかりうれしく侍るなり。あはれ無益の事どもかな。

〔千載集ニ予一首入ヲ悦事〕

千載集には予が歌一首いれり。「させる重代にもあらず、よみくちにもあらず、又、時にとりて人にゆるされたる好士にもあらず。しかあるを、一首にてもいれるはいみじき面目なり」とよろこび侍りしを、故筑州きゝて、「此事たゞなをざりにいはるゝかとおもふほどに、たび〳〵になりぬ。まことにおもひてのたまふ事に」(10オ)こそ。さるにては、この道にかならず冥加おはすべき人なり。そのゆへは、道理はしかあれど、人のしかおもふことはありがたきわざなり。此集をみれば、させることなき人々、みな十首、七、八首、四、五首いれるたぐひおほかり。かれらをみるに時は、いかばかりいやましくおもはるらんとをしはかるに、

あまりさへかくよろこばるゝ、いみじきことなり。道をたうとぶには、まづ心をうるはしくつかふにあるなり。今の世の人はみなしかあらず。身のほどもしらず、心たかくおごり、かまびすしきいきどをりをむすびて、事にふれてあやまりおほかり。今おもひあはせられよ」となん申侍し。まことにこの道の」（10ウ）冥加、身のほどにもすぎたり。ふるき人のいへること、かならずゆへあり。

〔不可立歌仙之由教訓事〕

おなじ人つねにをしへて云、「あなかしこ〳〵、歌よみなたて給そ。歌はよく心すべき道なり。われらがごとく、あるべきほどさだまりぬる物は、いかなるふるまひをすれども、それによりて身のはふるゝことはなし。そこなどは、重代の家にむまれてはやくみなし子になれり。人こそもちゐずとも、心ばかりはおもふ所ありて、身をたてんとほねばるべきなり。しかあるを、歌の道その身にたへたることなれば、こゝかしこの会に、かまへて〳〵と招請すべし。よろしき歌よみ出たらば、面目」（11オ）もあり、みちの名誉もいできぬべし。さはあれど、所々にへつらひありきて、人にしらるゝ方はありとも、遷度のさはりとはかならずなるべかめり。そこたちのやうなる人は、いと人にもしられずして、さし出る所には、『たれぞ』などとはるゝやうにて、心にくゝおもはれたるがよきなり。さてなに事もこのむほどに、その道にすぐれぬれば、きり、ふくにたまらずとて、そのきこえありて、しかるべき所の会にもまじはり、雲客月卿のむしろのすゑにのぞむこともありぬべし。これこそみちの遷度にてはあれ。こゝかしこの人非人がたぐひにつらなりて、人にしられ名をあげては、なにゝかは」（11ウ）せん。心にはおもしろくすましくおぼゆとも、かならず所きらひして、やう〳〵しと人にいはれむとおもはるべき」となんをしへ侍し。

今おもひあはすれば、いみじき恩をかうぶれるなり。さるはかしこきものゝならひなれば、わが子などをだに、おぼろけならでは教訓することもなかりしを、かやうにうしろやすくいひをしへけるは、又こと〴〵にあらず、管弦のみちにつけてあとつぐべき物とて、世にも人にもかずへられであれかしとおもひけるにこそ。のどかにおもへば、いとあはれになん。」（12オ）

〔千鳥鶴ノケ衣ヲキル事〕

俊恵法師が家をば歌林苑となづけて、月ごとに会し侍りしに、祐盛法師その会衆にて、寒夜千鳥と云題に、「千どりもきけりつるのけ衣」といふ歌をよみたりければ、人々、「めづらし」などいふほどに、素覚といひし人、たび〳〵是を詠じて、「おもしろく侍り。たゞし、寸法やあはず侍らん」といひ出たりけるに、ど

よみになりて、わらひのゝしりければ、ことさめてやみにけり。「いみじき秀句なれど、かやうになりぬればかひなき物なり」となん、祐盛かたり侍りし。

すべては、この歌の心えず侍なり。鳥はみな毛衣を衣とする物なれば、ほどにつけて」（12ウ）千鳥もみづから毛衣きずやはあるべき。かならずしも寸法ことのほかなるかり物すべきにあらず。かの「しろたへの鶴の毛衣としふとも」といふふる歌あるにこそあれ、いづれの鳥にもよまんにはゞかりあるべからず。さきにや申侍つる建春門院の殿上の歌合にも、「をしの毛衣」とよめる歌侍り。いさゝかうたがふ人ありけれど、判者、とがあるまじきやうになだめられたり。たゞし、「鶴の毛衣は毛の心にはあらず。別の事なり。つるばかりもたるなり」と申人侍れど、いまだその証をえみをよび侍らず。宏才の人にたづぬべし。」（13オ）

〔歌風情相似忠胤説法事〕

祐盛法師云、「妙荘厳王の二子の神変を尺するに、『大身を現ずれば虚空にみち、小身を現ずれば芥子にいる』などは、世のつねのことなるを、かの忠胤の説法に、『大身を現ずれば虚空にせはだかり、小身を現ずれば芥子の中に所あり』といへりけるが、いみじき和歌の風情にて侍なり。歌はかやうに心えて、ふることに色をそへつゝ、めづらしくとりなすべきなり。さのみあたらしきいごはいかゞあり、あへてよまれん」となんかたり侍し。

〔マスホノスゝキ〕

雨のふりける日、ある人のもとにおもふどちさしあつまりて、ふるきことなんかたり出たりけるつ」（13ウ）ゐでに、「ますほのすゝきといふはいかなるすゝきぞ」などいひしろふほどに、ある老人のいはく、「わたのべといふ所にこそ、このことしりたるひじりはありときゝ侍しか」とほの〴〵いひ出たりけり。登蓮法師そのなかにありて、この事をきゝてこと葉すくなになりて、又とふこともなく、あるじに「みの・かさしばしかし給へ」といひければ、あやしとおもひながらとり出たりけり。物がたりをもきゝさして、みのうちき、わらぐつさしはきていそぎ出けるを、人々あやしがりて、そのゆへをとふ。「わたの辺へまかるなり。としごろいぶかしくおもひ給へし事をしれる人ありときゝ」（14オ）て、いかでかたづねにまからざらん」といふ。おどろきながら、「さるにても雨やめて出給へ」といさめけれど、「いで、はかなき事をものたまふかな。命はわれも人も、雨のはれまなどまつべき事かは。何事もいましづかに」とばかりいひすてゝいにけり。いみじかりけるすき物なりかし。さて、ほいのごとくたづねあひて、とひきゝて、いみじうひざうしけり。

この事、第三代の弟子にてつたへならひて侍り。このすゝき、

おなじさまにてあまた侍り。ますほのすゝき・まそをのすゝき・まそうのすゝきとて、三くさ侍なり。ますほの薄といふは、ほのながくて一尺ばかりあるをいふ。かのます」（14ウ）かゞみをば、万葉集には「十寸のかゞみ」とかけるにて心うべし。まそをのすゝきといふは、真麻の心なり。これは、俊頼朝臣の歌にぞよみて侍る。「まそをのいとをくりかけて」と侍るかとよ。いとなどのみだれたるやうなるなり。まそうのすゝきとは、まことにすわうなりといふ心也。ますわうのすゝきといふべきを、ことばを略したるなり。色ふかきすゝきの名なるべし。これ、古集などにたしかにみえたることなけれど、和歌のならひ、かやうのふることをもちゐるも、又よのつねのこと也。あまねくしらず。みだりにとくべからず。

〔井デノ山ブキ并カワヅ〕

ある人かたりて云、「ことの縁ありて、ゐでと云所に」（15オ）まかりて一宿つかまつりたること侍りき。所のありさま、井手河のながれたる体、心もをよび侍らず。かのゐでの大臣のあとなればことはりなれど、河にたちならびたる石なども十余丁ばかり、さのみやとをくたてをかれけん、いしごとにたゞなをざりの事とはみえず、わざとたてたるやうになん侍し。そこに古老のものゝ侍しをかたらひて、むかしのことをたづね侍しつゐでに、『ゐでのやまぶきとて名にながれたるを、いとみえ侍らぬは、いづくにあるぞ』とたづね侍しかば、『さること侍り。彼ゐでの大臣の堂は、ひとゝせやけ侍にき。そのまへに、おび」（15ウ）たゝしくおほきなる山ぶき、むら〳〵みえ侍りき。その花のりんはこかわらけのおほきさにて、いくへともなくかさなりてなん侍し。それをさやうに申をきて侍にや。又、かのゐで河のみぎはにつきてひまもなく侍しかば、花のさかりには、こがねのつゝみなどをつきわたしたらんやうにて、他所にはすぐれてなん侍しかば、いづれを申けるにか、今わきがたく侍り。たゞし、げらうのいふかひなく侍ることは、かく名だかき草とて所もをき侍らず、『田つくるには、草をかり入たるがよくいでくる』と申て、なにともなくなんかりて侍る。それにとりて、ゐでのかはづ」（16オ）と申ことこそ、やうある事にて侍れ。世の人の思ひて侍るは、たゞかへるをばかはづといふぞとおもひて侍めり。それもたがひ侍らず。されど、かはづと申かへるは、ほかにはさらに侍らず、たゞこのゐで河にのみ侍なり。色くろきやうにて、いとおほきにもあらず、世のつねのかへるのやうにして、あらはにおどりありくことなどもいと侍らず。つねには水にのみすみて、夜ふくるほどにかれがなきたるは、いみじく心すみ、物あはれなるこゐにてなん侍。春夏の比かならずおはしてきゝ給へ』と申侍しかど、そのゝちとかくまぎ

れて、いまだたづね侍らず」となんかたり侍し。

この事、心にしみていみじく」(16ウ) おぼえ侍しかど、かひなくて三とせにはなり侍りぬ。又としたけては、あゆびかなはずして、おもひながらいまだかのこゑをきかず。かの登蓮があめもよにいそぎ出けんには、たとしへなくなむ。これをおもふに、今よりすゑざまの人は、たとひをのづからことのたよりありて、かしこにゆきのぞみたりとも、心とゞめてきかんとおもへる人もすくなかるべし。人のすきとなさけとは、年月にそへておとろへゆくゆへ也。

〔関ノ清水〕

或人云、「あふさかのせきのし水といふは、はしり井とおなじ水ぞと、なべて人しり侍めり。しかにはあらず。し水は別の所にあり。今は水もなければ、そこども」(17オ) しれる人だになし。三井寺に円実坊の阿闍梨といふ老僧、たゞひとりその所をしれり。かゝれど、さるあとやしりたるとたづぬるに人もなし。『われしなん後は、しる人もなくてやみぬべきこと』ゝ、人にあひてかたりけるよしつたへきゝて、彼阿闍梨しれる人のふみをとりて、建暦のはじめのとし十月廿日あまりの比、三井寺へゆきて、あざりたいめして、『かやうにふるきことをきかまほしうする人もかたく侍めるを、めづらしくなむ。いかでかしるべつかまつらざらん』とて、ともなひてゆく。せきでらより西へ二、三ちやうばかりゆきて、みちよりきたのつらにすこしたち」(17ウ) あがれる所に、一丈ばかりなる石のたうあり。そのたうの東へ三段ばかりくだりてくぼなる所は、すなはちむかしのせきのし水のあとなり。みちよりも三段ばかりや入たらん。今はこ家のしりへになりて、たうじは水のなくて、見所もなけれど、昔の名残おもかげにうかびて、いふになんおぼえ侍し。阿闍梨語云、『このし水にむかひて、水より北に、うすひわだふきたる家、ちかくまで侍けり。たれ人のすみかとはしらねど、いかにもたゞ人のゐ所にはあらざりけるなめり』とぞかたり侍し」。

〔貫之家〕

或人云、「つらゆきがとしごろすみける家のあとは、」(18オ) かでのこうぢよりはきた、とみのこうぢよりはひんがしのすみなり」。

〔業平家〕

又、「業平中将の家は、三条の坊門より南、たかくらより西に、高倉面にちかくまで侍き。はしらなどつねにもにず、ちまきばしらといふ物にて侍けるを、いつごろの人のしわざにか、後にれいのはらしらのやうにけづりなしてなん侍りし。なげしもみなまろにかどもなくつひなりて、まことにこだいの所とみえ侍き。中比はれあきらがふじたりけるとて、火にもやけずして、そのひさし

さありけれど、世のすゑにはかひなくて、ひ」(18ウ)とゝせの火にやけにき』。

〔周防内侍家〕

又、「すわうのないしの、『われさへのきのしのぶ草』とよめる家は、れんぜいほりかはのきたとにしとのすみなり」。

〔アサモガハノ明神〕

丹後のくによさのこほりに、あさもがはの明神と申かみいます。国のかみの神拝といふことにも、みてぐらなどえたまひて、かずまへらるゝほどの神にてぞおはすなる。これは、『昔、うらしまのおきなの神になれる』となんいひつたへたる。いとけふあることも也。物さはがしくはこあけゝむ心に、神とあとをとめ給へるは、さるべき権者などにやありけん。」(19オ)

〔関明神〕

あふさかのせきの明神と申は、むかしのせみまろ也。かのわら屋のあとをうしなはずして、そこに神となりてすみ給なるべし。今もうちすぐるにたよりにみれば、むかしふかくさの御門の御使にて、和琴ならひに、よしみねのむねさだ、良少将とてかよはれけんほどのことまでおもかげにうかびて、いみじくこそ侍れ。

〔和琴ノヲコリ〕

或人云、「和琴のおこりは、ゆみ六張をひきならして、是をかぐらにもちゐるけるを、『わづらはし』とて、のちの人のことにつくりうつせると申つたへたるを、かづさの国の済物のふるきしるし文のなかに、」(19ウ)『ゆみ六張』とかきて、注に『かぐらのれう』とかけり」とぞ。いみじきことなり。

〔中将ノ垣内〕

かうちの国たかやすのこほりに在中将のかよひすみけるよしは、かの伊勢物語に侍り。されど、そのあといづくともしらぬを、かしこの土民の説に、そのあとさだかに侍りとなん。今、中将のかきうちとなづけたる、すなはちこれ也。

〔人丸墓〕

人丸のはかはやまとの国にあり。はつせへまいる道なり。人丸のはかといひてたづぬるには、しる人もなし。かのところにはうたづかとぞいふなる。」(20オ)

〔貫之・躬恒勝劣〕

俊恵法師語云、「三条の大相国、ひゐの別当ときこえけるとき、二条の帥とふたりの人、みつね・つらゆきがおとりまさりを論ぜられけり。かたみにさま〴〵こと葉をつくしてあらそはれけれど、さらに事きるべくもあらざりければ、帥いぶかしくおもひて、『御気色とりて勝劣きらん』とて、白河院に御気色給はる。仰云、『われはいかでかさだめむ。としよりなどにとへかし』とおほせ

ごとありければ、ともにそのびんをまたれけるほどに、二、三日ありて俊頼まいりたりけり。帥このことをかたり出て、はじめあらそひ」(20ウ) そめしより院の仰のおもむきまでかたられければ、俊頼きゝて、たび〳〵打うなづきて、『みつねをば、なあなづらせ給ふそ』といふ。帥おもひのほかにおぼえて、『されば、貫之がおとり侍るか。ことをきり給べきなり』とせめけれど、なを〳〵たゞおなじやうに、『みつねをばあなづらせ給まじきぞ』といひければ、『おほし〳〵ことがらきこえ侍にたり。をのれがまけになりぬるにこそ』とて、からきことにせられけり。まことに、みつねがよみくち、ふかくおもひいれたる方は、又たぐひなき物なり」とぞ。」(21オ)

〔俊頼歌ヲクゞツウタフ事〕

ふけの入道殿に俊頼朝臣候ける日、かゞみのくゞつどもまいりて歌つかうまつりけるに、かみ歌になりて、

世の中はうき身にそへるかげなれやおもひすつれどはなれざりけり

この歌をうたひ出たりければ、俊頼、「いたり候(ハベ)にけりな」とてゐたりけるなん、いみじかりける。

永縁僧正、このことをつたへきゝてうらやみて、びわほうしどもをかたらひて、さま〴〵物とらせなどして、我よみたる「いつもはつ音の心ちこそすれ」といふ歌を、こゝかしこにてうたはせければ、時の人、「ありがたきすき人」となんいひける。今のあつより入道」(21ウ)

[翻刻者注、以下錯簡あり。本来32丁裏の後に続くべき一葉が竄入している。【 】で括ってそのまま翻刻する。]

【〔歌ヲイタクツクロヘバ必劣事〕

覚盛法師が云、「歌はあら〳〵しくとめもあはぬやうなる、ひとつのすがた也。それを、あまりさいくみてとかくすれば、はてにはまれ〳〵物めかしかりつる所さへうせて、なにゝてもなきこものになるなり」と申し、「さも」ときこゆ。

季経卿歌に、

としをへてかへしもやらぬをやまだはたねかす人もあらじとぞおもふ

この歌、ゑんなるかたこそなけれど、ひとふしいひて、さる体の歌と見給へしを、としへて彼集のなかに侍をみれば、

しづのおがかへしもやらぬ小山田に」(22オ) さのみはいかゞたねをかすべき

是はなをされたりけるにや、いみじうけおとりておぼえ侍る也。よく〳〵心すべきことにこそ。

〔依秀句心劣スル事〕

円玄阿闍梨といひし人の歌に、

ゆふぐれになにはの浦をながむれば霞にうかぶおきのつりぶね

この歌はいふなれど、ぬしの心おとりせらるゝ歌也。そのゆへは、「かすみにうかぶおきのつり舟」といへる、わりなきふしをおもひよりなんにとりては、いかゞ「ゆふぐれになにはの浦をながむれば」といふかみの句をばをがむ。まことに無念にみ】」(22ウ)又是をうらやましくやおもひけん、物もとらせずして、めくらどもに、「うたへ〳〵」とせめうたはせて、世の人にわらはれけりと。

〔同人歌ニ名ヲヨム事〕

法性寺殿に会ありけるとき、俊頼朝臣まいりたりけり。兼昌かうじにて歌よみあぐるに、としよりの歌に名をかゝざりければ、みあはせて、うちしはぶきて、「御名いかに」としのびやかにいひけるを、「たゞよみ給へ」といはれければ、よみける歌に、

うのはなの身のしらがともみゆるかなしづがかきねも俊頼にけり

とかきたるを、兼昌したなきして、しきりにう」(23オ)なづきつゝ、めでかんじけり。殿きかせ給て、めして御らんじて、いみじうせさせ給けりとぞ。かの歌の題をうた一首によみたりけん心ばせは、やゝまさりてこそ侍れ。

〔三位基俊ノ弟子ニナル事〕

五条三位入道語云、「そのかみ年廿五なりし時、基俊の弟子にならんとて、和泉前司道経をなかだちにて、彼人と車にあひのりて基俊の家にむかひたることありき。かの人、その時八十五なり。その夜八月十五夜にてさえありしかば、亭主ことに興に入て、歌のかみの句をいふ。

なかの秋とをかいつかの月をみて」(23ウ)

と、いとやう〳〵しくながめ出られたりしかば、予、これをつく。

きみがやどにて君とあかさむ

とつけたりけるを、なにのめづらしげもなきを、いみじうかんぜられき。さてのどかに物語して、『ひさしくこもりゐて、今の世の人の有様などもえしり給へず。この比たれをか物しりたる人にはつかまつりたる』とゝはれしかば、『九条大納言(伊通大臣)・中院大臣(雅定大臣)などをこそ、心にくき人にはおもひて侍めれ』と申しかば、『あないとをし』とて、ひざをたゝきてあふぎをなむたかくつかはれたりし。かやうに師弟の契をば申たりしかど、よみくちにいたりては、俊頼にはをよぶべ」(24オ)くもあらず。俊頼いとやむごとなきものなり」とぞ。

〔俊頼・基俊イドム事〕

或人云、「基俊は、俊頼をば蚊虻の人とて、『さはいふとも、こまのみちゆくにてこそあらめ』といはれければ、俊頼はかへりきゝて、『文時・朝綱よみたる秀歌なし。みつね・つらゆきつくりたる秀句なし』とぞの給ける」。

〔腰句ノ終ノテ文字難事〕

又云、「雲居寺のひじりのもとに、秋のくれの心を、俊頼朝臣、

あけぬともなを秋風のをとづれて野べのけしきをおもがはりすな

名をかくしたりけれど、これを『さよ』と心えて、基俊」(24ウ)いどむ人にて、難云、『いかにも歌は、こしの句のすゑに、て文字すへつるに、はかゞ〳〵しきことなし。さゝへていみじうきゝにくき物なり』と、くちあかすべくもなく難ぜられければ、俊頼はともかくもいはざりけり。その座に伊勢のきみ琳賢がゐたりけるになん、『ことやうなる証歌こそひとつおぼえ侍れ』といひ出たりければ、『いで〳〵うけたまはらん。よもことよろしき歌にはあらじ』といふに、

さくらちるこのした風はさむからで

と、はてのて文字をなが〳〵とながめたるに、色まさをになりて、物もいはずうつぶきたりける時に、」(25オ)俊頼朝臣はしのびにわらはれけり」。

〔琳賢基俊ヲタバカル事〕

いかなりけるときにか、琳賢は基俊となかのあしかりければ、たばからんとおもひて、あるとき、後撰の恋の歌の中に、人もしらずみゝとをきがかぎり廿首をえりいだして、かきつがひて、かの人のもとへもていにけり。「こゝに、人のことやうなる歌合をして、かちまけをしらまほしくつかまつるに、つけて給はらん」とて、とりいでたりければ、これをみて、後撰の歌といふ事ふつとおもひもよらず、おもふさまにやう〳〵に難ぜられたりけるを、こゝかしこにもてありきて、「左衛門佐にあひ申」(25ウ)たれば、なしつぼの五人がはからひもものならず。あはれ上古にもすぐれ給へる歌仙かな。これみ給へ」と軽慢しければ、みる人いみじうわらひけり。基俊かへりきゝて、やすからずおもはれけれど、かひなかりけり。

〔基俊僻難スル事〕

俊恵云、「法性寺殿にて歌合ありけるに、俊頼・基俊、ふたり判者にて、名をかくして当座に判しけるに、俊頼歌に、

くちおしや雲井かくれにすむたつもおもふ人にはみえける物を

これを基俊、鶴と心えて、『たづは、さはにこそすめ、」(26オ)雲井にすむことやはある』と難じて、まけになしてけり。されど俊

頼、その座にはこと葉もくはへず。其時、殿下、『こよひの判の詞、をの〳〵かきてまいらせよ』とおほせられけるときなん、俊頼朝臣、『これはたづにてはあらず、龍なり。かのなにがしとかゞ、龍をみんとおもへる心ざしのふかゝりけるにより、かれがためにあらはれてみえたりしことの侍るをよめるなり』とかきたりける。基俊、弘才の人なれど、おもひわたりけるにや、すべてはおもふはかりもなく、人のことを難ずるくせの侍ければ、ことにふれて失おほくぞありける』。」（26ウ）

〔艶書ニ古歌カク事〕

ある人、女のもとよりふみをえたり。その文に歌二首あり。「これ、かへしして給はせよ」とあつらへ侍るをみれば、二首ながら古今の恋の歌なり。かへしをすべきにあらず。いかゞせましとおもひめぐらして、そのいはまほしき心にかなへるふる歌二首をなん、をしへてかゝせて侍し。この事をあるふるき人にかたり侍しかば、「いみじきことなり。むかしいろごのみの、わざともこのみてしけるわざなり。しらぬをゝしはからひたること、往時にかなへる、いふなることなり」となむ感じ侍し。」（27オ）

〔女ノ歌ヨミカケタル故実〕

勝命談云、「しかるべき所などにて、無心なる女房などの歌よみかけたる、無術ことおほかり。それは故実のあるなり。まづきかぬよしにそらおぼめきして、たび〳〵とふ。されば、のちにはぢしらひて、さだかにもいはず。これをあつかふほどに、かへしおもひえたればいひつ、よみうべくもあらねば、やがておぼめきてやみぬる、ひとつのこと也。又、なまみやづかへ人にもあれ、さるべきざれたる女などの、そへごとゝなづけて、きゝしらぬ歌の一両句などをいひかくることあり。心えたれば、いかにもいひつべし。しらぬことならば、たゞ、『よもさしも』（27ウ）おぼされじ』などうちいひてあるべし。これはいづかたにもたがはぬ事也。ふかくおもふぞといふ心にも、また、うし、つらしといふ心にも、をのづから通用しつべし。心づきなきよしにいひたらんにこそ、心をやりたるやうなるべけれ、それも、ざれたるたはぶれにいひなせるさまにもなりぬべき也」。

〔猿丸大夫墓〕

或人云、「たなかみのしもに、そつかといふ所あり。そこにさるまろたいふがはかあり。庄のさかひにて、そこの券にかきのせたれば、みな人しれり」。」（28オ）

〔黒主神ニ成事〕

又、「しがのこほりに、大道よりすこし入て、山ぎはに、くろぬしの明神と申かみいます。是は昔のくろぬしが神になれる也」。

〔喜撰ガ跡〕

又、みむろとのおくに廿よ丁ばかり山中へ入て、うぢ山のきせがすみけるあとあり。家はなけれど、だうの石ずへなどさだかにあり。これら、かならずたづねてみるべきなり。

〔エノハ井〕

或人云、「宮内卿有賢朝臣、ときの殿上人七、八人あひともなひて、やまとの国かづらきの方へあそびにゆかれたる事ありけり。その時、ある所に、」(28ウ) あれたるだうのおほきにやう〳〵しきがみえければ、あやしくて、その名をあふ人ごとにとひけれど、しれる人もなかりけり。かゝるあひだに、ことの外にびんしろきおきなひとり、まみえけり。これはしもやうあらんとてたづねければ、『是をばとよらの寺とぞ申』といふ。人々、『いみじきことなり』と返々感じて、『さるにては、このへんにゑのは井といふ井やある』ととふ。『みなあせて水も侍らねど、今に侍り』とて、だうよりにしいくほどもさらぬほどにゆきて、をしへければ、人々けふに入て、やがてそこにむれゐて、かづらきといふ歌数十返うたひて、このおきなにきぬどもぬぎて」(29オ) かづけたりければ、おぼえぬことにあひて、よろこびかしこまりてさりにけり」とぞ。

ちかく土御門内大臣家に月ごとに影供せられける事の侍し比、しのびて御幸などのなる時も侍き。その会に、古寺月といふ題によみてたてまつりし、

ふりにけるとよらのてらのゑのは井になをしらたまをのこす

月かげ

五条三位入道これをきゝて、「やさしくもつかうまつれるかな。入道がしかるべからん時とりいでんとおもひ給へつることを、かなしくせんぜられにたり」とて、しきりに感ぜられ侍き。この事、さいばらのこと葉なれば、誰もしりたれ」(29ウ) ど、これよりさきには歌によめることみえず。そのゝちこそ、れんぜいの中将定家の歌によまれ侍しか。

〔歌ノ半臂句〕

俊恵、物語の次にとひて云、「遍昭僧正の歌に、

たらちねはかゝれとてしもむばたまのわがくろかみをなでずやありけん

この歌のなかに、いづれのこと葉かことにすぐれたる、おぼえんまゝにのたまへ」といふ。予云、「『かゝれとてしも』といひて、『むばたまの』とやすめたるほどこそは、ことにめでたく侍れ」といふ。「かくなり〳〵。はや歌はさかひにいられにけり。歌よみはかやうの」(30オ) ことにある。それにとりて、『月』といはむとて、『ひさかた』とをき、『山』といはむとて『あしびき』といふはつねのことなり。されど、はじめの五文字にてはさせる興なし。こしの句によくつゞけてことばのやすめにをきたるは、い

みじう歌のしなもいでき、ふるまへるけすらひともなるなり。ふるき人、これをば『半臂の句』とぞいひ侍ける。はんぴはさせるようなき物なれど、装束のなかにかざりとなる物也。歌の卅一字、いくほどもなきうちにおもふことをいひきはめんには、むなしきことをばひと文字なりとも申べくもあらねど、このはんぴの句は、かならずしなとなりて」(30ウ)すがたをかざる物なり。すがたに花麗きはまりぬれば、をのづから余情となる。是を心うるを、さかひにいるといふべし。よく〳〵この歌をあんじてみ給へ。半臂の句も、せんつぎのことぞ。まなこはたゞ『とてしも』といふ四文字なり。かくいはずは、半臂せんなからましとこそみえたれ」となん侍りし。

〔蘇合ノスガタ〕

抑、楽の中に蘇合といふ曲あり。これをまふには、五帖まで帖々をきれ〴〵にまひおはりてのち、破をまふ。やがてつゞけてきうをまふべきに、急のはじめ一反をばまことにまふ」(31オ)ことなし。かたのごとく拍子ばかりにあしをふみあはせて、うちやすみつゝ、二反のはじめよりうるわしくまふなり。このけすらひは、たがはぬ半臂の句の心也。歌と楽と、みちことなれど、めでたきことはをのづからかよへるなるべし。かよはしてしらざらん人は、なにとかはおもひわかむ。かたのごとく両方を心えておもふためには、ことに典興あること也。されば、蘇合をば半臂の句あるまひといふ。この歌のさまをば蘇合のすがたともいひてんかし。

〔カミノ句ヲトレル秀歌〕

俊恵云、「歌は秀句をおもひえたれども、すゑいひかなふることのかたきなり。後徳大寺左府、」(31ウ)

なごのうみの霞のまよりながむればいる日をあらふおきつしらなみ

頼政卿の歌に、

すみよしの松のこまよりながむれば月おちかゝるあはぢしまやま

此両首、ともにかみの句おもふやうならぬ歌也。『いる日をあらふ』といひ、『月おちかゝる』などいへる、いみじき詞なれど、むね・こしの句をばえいひかなへず、遺恨のこと也」。

〔歌詞ノ糟糠〕

二条中将雅経談云、「歌には、この文字のなくもがなとおぼゆることのある也。兼賢といふものゝ歌に、」(32オ)

月はしるやうき世の中のはかなさをながめても又いくめぐりかは

これはよろしくよめるにとりて、『世の中』の『なか』といふふたつの文字がいみじうわろき也。たゞ『うき世のはかなさを』と

いはまほしき也。

又、頼政卿の歌に、

すみのぼる月のひかりによこぎれてわたるあきさのをとのさ

むけさ

これも『ひかり』といふ三文字のわろき也。『月によこぎれて』とあらば、今すこしきら〳〵しくきこゆべきなり。この詞をば、歌のなかのきずと[や]いふべからん。ふかくおもひいれざらん人はわきまへがたし。」(32ウ)

［翻刻者注、錯簡あり。本来ここに22丁表裏の一葉が入る。］

所もなきこと葉つゞき也かし。おなじ浦なりともゆふぐれなりとも、めづらしきやうにおもふ所ありてつゞくかたも侍なん物を。さほど手づゝにて、いかにして下の句をばおもひよりけるにか、とおぼえ侍也」。

〔案過テ成失事〕

愚詠の中に、

時雨にはつれなくもれし松の色をふりかへてけりけさのはつ

ゆき

これを俊恵難云、「たゞ『つれなくみえし』といふべき也。あまりわりなくわかせるほどに、かへりてみゝとまるふしとなれるなり。

ある所の歌合に、かすみを、俊恵が歌に、」(33オ)

ゆふなぎにゆらのとわたるあまをぶねかすみのうちにこぎぞ

いりぬる

そのたびの会に、清輔朝臣たゞおなじやうによみたりしにとりて、かれは『かすみのそこに』とよめりしを、人の、『入海かとおぼゆ』と難じ侍りし也。のさびなる所をば、たゞ世のつねにいひながすべきを、いたりあんじすぐしつれば、かへりてみゝとまるふしとなる也。たとへば、いとをよる人の、いたくけうらによらんと、よりすぐしつれば、ふしとなるがごとし。これをよくはからふを上手といふべし。風情はをのづからいでくる物なれば、ほどにつけつゝもとめうることもあれど、かやうのことに」(33ウ)上手にて、そのけぢめはみゆる也。されば、ゑせ歌よみの秀句には、おほくはたらぬ所のいでくるぞかし」。

〔静縁コケウタヨム事〕

静縁法師、みづからが歌をかたりていはく、

「しかのねをきくにわれさへなかれぬるたにのいほりはすみ

うかりけり

とこそつかうまつりて侍れ。いかゞ侍る」といふ。予が云、「よろしく侍り。たゞし『なかれぬる』といふこと葉こそ、あまりこけすぎて、いかにぞやおぼえ侍れ」といふを、静縁法師云、「そ

のこと葉をこそこの歌の詮とは思給ふるに、この難はことの外にこそおぼえ侍る」とて、いみじくわろく難ずるとおもひげにて」（34オ）さりぬ。よしなくおぼゆるまゝに物をいひて、心すべかりける事をとくやしくおもふほどに、十日ばかりありて、又きたりていふやう、「一日の歌、難じ給しを、かくれごとなし、心えずおもひ給へて、いぶかしくおぼえ侍しまゝに、さはいふとも、大夫公のもとにゆきてこそ、我ひが事はきらめと思て、ゆきてかたり侍りしかば、『なでうみばうのかゝるこけ歌よまるゝぞとよ。「なかれぬる」とはなにごとぞ。さまでなの心ねや』となん、はしたなめられて侍りし。されば、よく難じ給けり。我あしく心えたりけるぞと、をこたり申にまうでたるなり」といひてかへり侍りにき。心のきよさこそ、ありがたく侍れ。」（34ウ）

〔代々恋中ノ秀歌〕

俊恵語云、「故左京大夫顕輔語云、『後拾遺の恋の歌の中には、

ゆふぐれはまたれし物を今はたゞゆくらむかたをおもひこそやれ

これをおもて歌とおもへり。金葉集には、

まちし夜のふけしをなにゝなげきけんおもひたへてもすぐしける身を

これをすぐれたる恋とせり。わがえらべる詞花集には、

わすらるゝ人めばかりをなげきにて恋しきことのなからましかば

この歌をかのたぐひにせんとなむおもひ給へ」（35オ）る。いとかれらにもおとらず、けしうはあらずこそ侍』といはれけり。しかあるを、俊恵が歌苑抄の中には、

ひと夜とてよがれしとこのさむしろにやがてもちりのつもりぬるかな

これをなむ、おもて歌とおもひ給ふる、いかゞ侍らん」とぞ。

今これらに心づきて新古今をみれば、わが心にすぐれたる歌三首みゆ。いづれともわきがたし。後の人さだむべし。

かくてさは命やかぎりいたづらにねぬ夜の月のかげをのみみて

野べの露は色もなくてやこぼれつる袖よりすぐるおぎのうはかぜ」（35ウ）

かへるさの物とや人のながむらむまつよながらのありあけの月

俊恵云、「顕輔卿の歌に、

あふとみてうつゝのかひはなけれどもはかなき夢ぞいのちなりける

この歌を俊頼朝臣感じていはく、『これはむくの葉みがきして、

はなあぶらひける御歌也。よの人ならば、「うつゝのかひはなけれどもはかなきゆめぞうれしかりける」とぞよまゝし。たがかくはよまん』とぞほめられける」。

〔歌人ハ不可証得事〕

俊恵に和歌の師弟の契むすび侍しはじめ」(36オ)のこと葉にいはく、「歌はきはめたる故実の侍る也。われをまことに師とたのまれば、このことたがへらるな。そこはかならずすゑの世の歌仙にていますかるべきうへに、かやうに契をなさるれば、申侍る也。あなかくこ〳〵、われ人にゆるさるゝほどになりたりとも、証得して、われはきそくしたる歌よみ給ふな。ゆめあるまじきこと也。後徳大寺のおとゞは無左右手だりにていませしかど、その故実なくて、今はよみくち後てになり給へり。そのかみ、さきの大納言などきこえし時、道を執し人をはぢて、みがきたてたりし時のまゝならば、今はかたならぶ人すくなから」(36ウ)まし。『われいたりにたり』とて、この比よまるゝ歌は、すこしも思いれず、やゝ心づきなきことばうちまぜたれば、なにゝよりてかは秀歌もいでこん。秀逸なければ、又人もちゐず。歌は、当座にこそ人がらによりてよくもあしくもきこゆれど、後朝に今一座しづかにみたるたびは、さはいへども、風情もこもりすがたもすなをなる歌こそ、みとをしは侍れ。かくきこゆるはおこのためしなれど、俊恵は、この比もたゞ初心のころのごとく歌を案じ侍ぬ。わが心をばつぎにして、あやしけれど人のほめもそしりもするをもちい侍なり。これがふるき人のをしへ侍りし事なり。」(37オ)このことたもてるしるしにや、さすがにおいはてたれど、俊恵を『よみくちならず』と申人はなきぞかし。又こと事にあらず、この故実をあやまたぬゆへなり」。

〔非歌仙歌ノ難ジタル事〕

歌は、名にながれたる歌よみならねど、ことはりをさきとしてみゝちかき道なれば、あやしのものゝ心にも、をのづから善悪はきこゆる也。長守語云、「述懐の歌どもあまたよみ侍し中に、ざれごとうたに、

火おこさぬ夏のすびつの心ちして人もすさめずゝさまじの身

や

とよめるを、十二になる女子の、これをきゝて、」(37ウ)『冬のすびつこそ、火のなきは今すこしすさまじけれ。などさはよみ給はぬぞ』と申侍しに、難ぜられてのぶる方なく」などかたりしこそ、おかしかりしか。

〔思余比自然ニ歌ヨマル、事〕

又、心にいたくおもふことになりぬれば、をのづから歌はよまるゝ也。金葉集に、「よみ人しらず」と侍るかとよ、

身のうさをおもひしとけば冬の夜もとゞこほらぬはなみだなりけり

この歌は、仁和寺のあはぢのあざりといひける人のいもうとのもとなりけるなま女房の、いたく世をわびてよみたりける歌也。もとよ」(38オ)り歌よみならねば、又よめる歌もなし。たゞおもふあまりに、をのづからいはれたりけるにこそ。

〔範兼家会優ナル事〕

俊恵云、「和歌会のありさま、げに〳〵しくいふにおぼえしことは、つぎの所にとりては、ちかくは範兼卿の家の会のやうなることはなし。亭主のさる人にて、いみじうもてなして、ことにふれつゝれうじならず、人にはぢ、道を執して、ほむべきをば感じ、そしるべきをば難じ、ことゞ〳〵にゑありて、みだれがはしきことゆめにもなかりしかば、座へいる人もみなそのおもむきにしたがひて、いかでよろしくよみ」(38ウ)いでんと思へりき。さればよき歌もいでき、はかなくめづらしきひとふしをおもひよれるにつけても、かひゞ〳〵しき心ちして、いさましくなんありし。兼日の会には、みな歌を懐中して、当日の儀いたづらにほどをふることなし。もし当座に会あれば、をの〳〵ところゞ〳〵にさしのきつゝ、沈思しあひたるさまなどまでも、ゑむにあらまほしく侍しかば、させることなき歌も、ことがらにあさられて念にきこえ侍き。

〔近代会狼籍事〕

この比、人々の会につらなりてみれば、まづ会所のしつらひよりはじめて、人の装束のうちとけ」(39オ)たるさま、をの〳〵がけしきありさま、みだれがはしき事かぎりなし。いみじう十日、はつかかけて題をいだしたれど、日比はなにわざをしけるにか、当座にのみ歌をあんじて、すゞろに夜をふかしてけふをさまし、ひかうのときをわかず心ゞ〳〵に物語をし、先達にもはぢず、面々に証得したるけしきどもははなはだしけれど、げに歌のさまをしりてほめそしる人はなし。まれ〳〵ふるき人のよきあしきをさだむるも、人のけしきをはからひ、偏頗をさきとしたれば、案ずるにつけてもあぢきなく、」(39ウ)よろしき歌をよめるにつけても、よるのにしきにことならず。たかく詠ずるをよきことゝて、くびすぢをいらゝかし、こゑをよりあはせたるさまなど、いみじうこゝろづきなし。すべてにぎはゝしきにつけてもしなゝく、やさしがるにつけてもわざとびたり。げには人の心のそこまですかずして、たゞ人まねにみちをこのむゆへなめりとぞおぼえ侍」とぞ。

〔俊成入道物語〕

五条三位入道云、「俊恵は当世の上手也。されど俊頼には猶をよびがたし。俊頼はまのなく思ひいたらぬくまなく、ひとかたならずよ」(40オ)めるが、ちからもをよばぬなり。今の世には、頼

政こそいみじき上手なれ。かれだに座にあれば、めのかけられて、かれにことひとつせられぬとおぼゆるなり」。

〔頼政歌道ニスケル事〕

俊恵云、「頼政卿はいみじかりける歌仙也。心のそこまで歌になりかへりて、つねにこれを忘れず、心にかけつゝ、鳥の一声なき、風のそゝとふくにも、まして花のちり、葉のおち、月の出入、あめ、雪などのふるにつけても、たちゐ、おきふしに、風情をめぐらさずといふことなし。まことに秀歌のいでくるもことはりとぞおぼえ侍し。かゝれば、しかるべき時名あげたる歌ども、おほく」（40ウ）は疑作にてありけるとかや。おほかたの会の座につらなりて歌うち詠じ、よきあしきことはりなどせられたるけしきも、ふかく心にいれる事とみえていみじかりしかば、かの人のある座には、なにごともはへあるやうに侍し也」。

〔清輔弘才事〕

勝命云、「清輔朝臣、歌のかたの弘才はかたならぶ人なし。いまだよもみをよばれじとおぼゆることを、わざとかまへてもとめいでゝたづぬれば、みなもとよりさたしふるされたることゞもにてなん侍し。はれの歌よまんとては、『大事はいかにも古集をみてこそ』といひて、」（41オ）万葉集をぞかへす〴〵みられ侍りし」。

〔俊成自讃歌事〕

俊恵云、「五条三位入道のみもとにまでたりしつゐでに、『御詠のなかには、いづれをかすぐれたりとおもほす。人はよそにてやう〳〵にさだめ侍れど、それをばもちい侍るべからず。まさしくうけ給はらん』ときこえしかば、

『ゆふされば野辺の秋風身にしみてうづらなくなりふかくさのさと

是をなん身にとりておもて歌とおもひ給ふる』といはれしを、俊恵又云、『世あまねく人の申侍には、」（41ウ）

おもかげに花のすがたをさきだてゝいくへこえきぬみねのしら雲

これをすぐれたるやうに申侍るはいかに』ときこゆ。『よそにはさもやさだめ侍らん、しり給へず。なをみづからは、さきの歌にはいひくらぶべからず』とぞ侍し」とかたりて、これをうち〳〵に申しは、

〔俊恵難俊成秀歌事〕

「かの歌は、『身にしみて』といふこしの句の、いみじう無念におぼゆる也。これほどになりぬる歌は、景気をいひながして、たゞそらに身にしみけんかしとおもはせたるこそ、心にくゝもいふにも侍れ。いみじくいひもてゆきて、」（42オ）歌の詮とすべきふしをさは〳〵といひあらはしたれば、むげにことあさくなりぬ

るなり」とぞ。

〔俊恵秀歌〕

そのつゐでに、「わが歌の中に、

みよしのゝ山かきくもりゆきふればふもとのさとはうちしぐれつゝ

これをなん、かのたぐひにせんとおもひ給ふる。もし世のすゑにおぼつかなくいふ人もあらば、『かくこそいひしか』とかたり給へ」とぞ。

〔俊成・清輔歌判有偏頗事〕

顕昭云、「この比の和歌の判は、俊成卿・清輔朝臣、さうなきこと也。しかあるを、ともに偏頗ある判者なるにとりて、そのやうのかはりたるなり。」（42ウ）俊成卿は、我もひが事をすとおもひ給へるけしきにて、いともあらがはず、『世中のならひなれば、さなくもいかゞは』などやうにいはれき。清輔朝臣は、外相はいみじう清簾なるやうにて、偏頗といふこと、つゆもけしきにあらはさず、をのづから人のかたぶくことなどもあれば、けしきをあやまりてあらがひ論ぜられしかば、人のみなそのよしを心えて、さらにいひ出ることもなかりき」。

〔隠作者事〕

大方は、歌を判するには、作者をかくすといひながら、ひとへにしらぬもゆゝしき大事也。又、名あらはれたるもはゞからはしく、おも」（43オ）てにまくる事おほかり。たゞかくせるやうにて、うち〳〵にいさゝか心えたるがめでたき也。

〔道因歌ニ志深事〕

此道に心ざしふかゝりしことは、道因入道ならびなきものなり。七、八十になるまで、「秀歌よませ給へ」といのらんため、かちよりすみよしへ月まうでしたる、いとありがたき事也。ある歌合に、清輔判者にて、道因が歌をまかしたりければ、わざと判者のもとにまうでゝ、まめやかになみだをながしつゝなきうらみければ、亭主いはんかたなく、「かばかりの大事にこそあはざりつれ」とぞかたられける。九十ばかりになりて」（43ウ）は、みゝなどもおぼろなりけるにや、会のときは、ことさらに講師の座のきはにわけよりて、わきもとにつぶとそひゐて、みづはさせるすがたにみゝをかたぶけつゝ他事なくきゝけるけしきなど、なをざりの事とはみえざりき。千載集えらばれ侍しことは、かの入道うせてのちの事也。されど、なき跡にも、さしもみちに心ざしふかゝりし物也とて、優して十八首を入られたりけるに、夢のうちにきたりて、なみだをおとしつゝよろこびいふとみ給たりければ、ことにあはれがりて、今二首をくはへて廿首になされたりけるとぞ。しかるべ」（44オ）かりけることにこそ。

〔隆信・定長一雙事〕

ちかごろは、隆信、定長とつがひて、わかくより人の口におなじやうにいはれ侍き。かの俊恵が家にて、百首を十首づゝ十度によみて、十座の百首となづけたることのありけるには、いどみてをの〳〵心をつくしたりける、げにいづれもおとらざりけり。又、俊成卿の十首歌よませ侍ける時も、ともによくよみたりければ、かの卿は「世に人のひとつつがひに申よしきけど、なにごとかはあらんと思ひてすぎつるに、この十首の歌にこそ返抄も給つべくおぼゆれ」と」(44ウ) なんいはれける。しかあるを、九条殿右大臣と申とき、人々に百首をめされし時に、隆信作者に入て、公事なるうちにも日かずもなくて物さはがしかりければ、いとよろしき歌もなかりけり。その比、定長は出家の後にて、身のいとまもあり、今すこしのどやかに案じて、無題の百首をみがきたてゝとりいだしたりけるに、たとしへなくまさりたりければ、その時より「寂蓮左右なし」といふことになりにき。御所辺には、「いかなるおこのものゝ、おなじつらの口とはつがひそめたるぞ」とまでおほせられけるとぞ。後に隆信からきことにして、「はやくしなましかば、さる」(45オ) ほどの歌仙にてやみなまし。よしなき命のながくて、かくみちのはぢをあらはすこと」ゝぞいはれける。

〔大輔・小侍従一雙事〕

ちかく女歌よみの上手にては、大輔・小侍従とて、とり〴〵にいはれ侍き。大輔は今すこし物などしりて、ねづよくよむかたはまさり、侍従ははなやかに、めおどろく所よみすふることのすぐれたりし也。なかにもうたのかへしする事のすぐれたりとぞ。「本歌にいへることのなかに、さもありぬべき所をよくみつめて、これをかへす心ばせの、あふかたきもなきぞ」とて、俊恵法師は申侍りし。」(45ウ)

〔俊成女・宮内卿両人歌ノヨミヤウノカハル事〕

今の御所には、俊成卿女ときこゆる人、宮内卿と、このふたりの女房、昔にもはぢぬ上手どもなり。歌のよみやうこそことのほかにかはりて侍けれ。人のかたり侍りしは、俊成卿女は、はれの歌よまんとては、まづひごろかけてもろ〳〵の集どもをくりかへしよく〳〵みて、おもふばかりみをはりぬれば、みなとりをきて、火かすかにともし、人とをく、をとなくしてぞあんぜられける。宮内卿は、はじめよりをはりまで草子・まきものとりこみて、きりとうだいに火ちか〴〵とゝもしつゝ、かつ〴〵かきつけ〳〵、よるもひるもおこたらずなむ案じける。この人はあまり歌をふかく案じてやまひに」(46オ) なりて、ひとたびはしにはづれしたりき。ちゝの禅門、「なにごとも身のあるうへの事にてこそあれ。かくしもやまひになるまでは、いかに案じ給ふぞ」といさめられ

けれどももちゐず、つゐに命もなくてやみにしは、そのつもりにやありけん。寂蓮入道はことに〳〵このことをいみじがりき。

〔具親歌ヲ不入心事〕

せうとの具親少将兵衛佐の、歌に心をいれぬをぞにくみ侍し。「なにゆへ身をたてたる人なればしかあるらん。とのゐ所をまれ〳〵たち入てみれば、はれの御会などのあるころも、『ゆみよ、ひきべよ』などゝりこみて、さいくまへにすへて、歌を大事」(46ウ)ともおもはぬ」、くちおしきことにぞいひ侍し。

〔会歌ニスガタワカツ事〕

御所にあさゆふ候し比、つねにもにずめづらしき御会ありき。「六首の歌に、みなすがたをよみかへてたてまつれ」とて、「春・夏はふとくおほきに、秋・冬はほそくからび、恋・旅はゑんにやさしくつかうまつれ。これもしおもふやうによみおほせずは、其よしをありのまゝに申あげよ。歌のさましれるほどを御覧ずべきためなり」とおほせられたりしかば、いみじき大事にて、かたへは辞退す。心にくからぬ人をば、又もとよりめされず。かゝれば、まさしくその座にまいりつらなれる人、」(47オ)殿下・大僧正御坊・定家・家隆・寂蓮・予、わづかに六人ぞ侍りし。愚詠に、ふとくおほきなる歌に、

雲さそふあまつはるかぜかほるなりたかまの山の花ざかりかも

うちはぶき今もなかなむほとゝぎす卯花月よさかりふけゆく

ほそくからびたる歌、

よひのまも月のかつらのうすもみぢてるとしもなきはつ秋のそら

さびしさはなをのこりけりあとたゆるおち葉がうへにけさはつゆき

ゑんにやさしき歌、」(47ウ)

しのばずよしぼりかねつとかたれ人物おもふ袖のくちはてぬまに

たび衣たつあかつきのわかれよりしほれしはてやみやぎのゝ露

〔寂蓮・顕昭両人心事〕

このなかに、春の歌をあまたよみて寂蓮入道にみせ申しとき、このたかまの歌を「よし」とて、てんあはれたりしかば、かきてたてまつりてき。すでにかうぜるゝ時にいたりてこれをきけば、入道の歌、おなじくたかまの花をよまれたりけり。我歌にゝたらばちがへんなどおもふ心もなく、ありのまゝにことはられける、いとありがたき心なりかし。」(48オ)さるは、まことの心ざまなどをば、いたく神妙なる人ともいはれざりしを、我えつる道なれ

ば、心ばへもよくなるなめり。

そのかみ、せんやう門院の御供花の会の歌に、とこなつ契りひさしといふ題に、「うごきなき世のやまとなでしこ」とよめりしをば、ある先達みて、「わが歌にゝたり。よみかへよ」とあながちに申侍しかば、ちからなくて当座によみかへてき。たとしへなき心也。

抑、人のとくをほめんとするほどに、我ため面目ありしたびの事をなが〳〵とかきつゞけて侍る、歌おかしく、されどこのふみのとくぶんに、自讃せう〳〵まぜてもいかゞ侍らむ。」（48ウ）

〔式部・赤染勝劣事〕

或人云、「俊頼の髄脳に、定頼中納言、公任大納言に、しきぶ・あかぞめとがをとりまさりをとはる。大納言いはく、『式部は、「こやとも人をいふべきに」とよめる物なり。ひとつ口にいふべからず』と侍ければ、中納言かさねて云、『式部が歌には、「はるかにてらせ山のはの月」といふ歌をこそ、世の人は秀歌と申侍めれ』と云。大納言いはく、『それその世の人のしらぬことをいふよ。くらきよりくらきに入ことは、経の文なればいふにもをよばず。すゑの句は、又もとにひかれて、やすくよまれぬべし。「こやとも人をいふべきに」といひて、「ひまこそなけれあしのやへぶき」といへるこそ、ぼんぶのおもひよるべきことにもあらね』とこたへられけるよしはべめり。」（49オ）是にふたつの不審あり。一には、式部をまされるよしことはられたれど、その比のしかるべき会、はれの歌合などをみれば、あかぞめをばさかりにしやうして、式部はもれたることおほかり。一には、式部が二首の歌を今みれば、『はるかにてらせ』といふ歌は、こと葉もすがたもことのほかにたけたかく、又けいきもあり。いかなれば大納言はしかことはられけるにや。かた〴〵おぼつかなくなん侍」といふ。

予心みにこれを会尺す。式部・赤染が勝劣は、大納言ひとりさだめられたるにあらず。世こぞりて式部をすぐれたりとおもへり。しかあれど人のしわざは、ぬしのある世には、その人がらによりてをとりまさることあり。歌の」（49ウ）かたは式部さうなき上手なれど、身のふるまひもてなし、心もちゐなどの、あかぞめにはをよびがたかりけるにや。むらさき式部が日記といふ物をみ侍りしかば、「和泉式部はけしからぬかたこそあれど、うちとけてふみはしりかきたるに、そのかたのざへあるかたも、はかなきことばのにほひもみえ侍めり。歌はまことの歌よみにはあらず。くちにまかせたることゞもに、かならずおかしきひとふし、めとまる、よみそへ侍めり。されど、人のよみたらん歌なむじことはりゐたらん、いでやさまでは心えじ。たゞくちに歌よまるゝなめり。はづかしの歌よみやとはおぼえず。丹波のかみのきたの方をば、み

やどのな」(50オ) どわたりには『まさひら衛門』とぞ侍る。ことにやごとなきほどならねど、まことにゆへ〳〵しう、歌よみてよろづのことにつけてよみちらさねど、きこえたるかぎりは、はかなきおりふしのことも、それこそはづかしきくちつきに侍れ』とかけり。かゝれば、その時は人ざまにもちけたれて、歌のかたもおもふばかりもちゐられねど、まことには上手なれば、秀歌もおほく、ことにふれつゝ、まのなくよみをくほどに、撰集どもにもあまたいれるにこそ。そねのよしたゞといふもの、人かずにもあらず、円融院の子日の御幸に推参をさへして、おこの名をあげたる物ぞかし。されど、今は歌のかたにはやむごとなき」(50ウ) 物におもへり。一条院の御時、みち〳〵のさかりなる事を江帥のしるせるなかにも、「歌よみは、道信・実方・長能・輔親・式部・衛門・曽祢好忠」と、この七人をこそしるされて侍るめれ。是もみづからによりて、いける世にはよおぼえもなかりけるなるべし。

さて、式部が歌にとりてのおとりまさりは、公任卿のことはりのいはれぬにもあらず、今の不審のひが事なるにもあらず。これはよく心えて思ひわくべきこと也。歌はつくりたてたる風情、たくみはゆゝしけれど、その歌のしなをさだむる時、さしもなきこともあり。又、おもひよれる所はをよびがたくしもあらねど、うち」(51オ) きくにたけもあり、ゑんにもおぼえて、景気うかぶうたも侍りかし。されば詮は、歌よみのほどをまさしくさだめんには、「こやとも人を」といふ歌をとるとも、「式部が秀歌はいづれぞ」とえらむには、「はるかにてらせ」といふ歌のまさるべきにこそ。たとへば、みちのほとりにてなをざりにみつけたりとも、こがねはたからなるべし。いみじくたくみにつくりたてたれど、くし・はりなどのたぐひはさらにたからとするにたらず。又、心ばせをいはん日は、こがねもとめたる、さらにぬしの高名にあらず。はりのたぐひたからにあらねど、これを物の上手のしわざとはさだむべきがごとくなり。しかあれど、」(51ウ) 大納言の、その心を会せらるべかりけるにや。もしは又、歌の善悪も世々にかはる物なれば、その世に、「こやとも人を」といふ歌のまさる方もありけるを、すなはち人の心えざりけるにや。後の人さだむべし。

〔近代歌体〕

或人問云、「この比人の歌ざま、二面にわかれたり。中比の体を執する人は、今の世の歌をばすゞろことのやうにおもひて、やゝだるま宗などいふ異名をつけてそしりあざける。又、この比やうをこのむ人は、中比の体をば、『俗にちかし、み所なし』ときらふ。やゝ宗論のたぐひにて、事きるべくもあらず。末学のため是非にまどひぬべし。いかゞ心うべき」といふ。」(52オ)

或人答云、「これは此世の歌仙のおほきなるあらそひなれば、たやすくいかゞさだめん。たゞし、人のならひ、月ほしの行度をもさとり、おに神の心をもをしはかる物なれば、おぼつかなくとも心のをよぶほど申侍らん。又、おもはれんにしたがひてことはらるべし。おほかた、この事を人の水火のごとくおもへるが心もえずおぼえ侍る也。すべて歌のさま、世々にことなり。むかしは文字のかずもさだまらず、思ふさまに口にまかせていひけり。かのいづもやへがきのうたよりこそは、五句みそもじにさだまりにけれど、万葉の比などまでは、なをねんごろなる心ざしをのぶばかりにて、あ」(52ウ) ながちにすがた・ことばをえらばざりけるにや、とみえたり。中比、古今の時、花実ともにそなはりて、そのさままち〳〵にわかれたり。後撰には、よろしき歌古今にとりつくされてのち、いくほどもへざりければ、歌えがたくしてすがたをばえらばず、たゞ心をさきとせり。拾遺の比より、その体ことのほかに物ちかくなりて、ことはりくまなくあらはれ、すがたすなをなるをよろしとす。そのゝち、後拾遺のとき、今すこしやはらぎて、むかしの風をわすれたり。『やゝそのときのふるき人などは是をうけざりけるにや、「後拾遺すがた」となづけてくちおしきことにしける』とぞ、ある」(53オ) 先達かたり侍し。金葉は又わざともおかしからんとして、軽々なる歌おほかり。詞花・千載、大略後拾遺の風なるべし。歌のむかしよりつたはりきたれる、かくのごとし。かゝれば、拾遺よりのち、そのさまひとつにしてひさしくなりにけるゆへに、風情やう〳〵つき、こと葉世々にふりて、この道時にしたがひておとろへゆく。むかしはたゞ花を雲にまがへ、月をこほりにゝせ、もみぢをにしきにおもひよするたぐひをおかしきことにせしかど、今はその心いひつくして、雲のなかにさま〴〵の雲をもとめ、こほりにとりてめづらしき意ｲこをそへ、にしきにことなる」(53ウ) ふしをたづね、かやうにやすからずたしなみて思ひうれば、めづらしきふしはかたくなりゆく。まれ〳〵えたれども、むかしをへつらへる意ともなれば、いやしくくだけたるさまなり。いはんやことばにいたりては、いひつくしてければ、めづらしき詞もなく、めとまるふしもなし。ことなる秀逸ならねば、五七五をよむに、七々はそらにをしはからるゝやうなり。こゝに今の人、歌のさまの世々によみふるされにけることをしりて、さらに古風にかへりて幽玄の体なをまなぶことのいできたるなり。これによりて、中古のながれをならふともがら、めをおどろかしてそしりあ」(54オ) ざける。しかあれど、まことには心ざしはひとつなれば、上手と秀歌とはいづかたにもそむかず。いはゆる清輔・頼政・俊恵・登蓮などがよみくちをば、今の世の人もすてがたくす。いまやうすがたの歌のなかにも、よ

くよみつるをば誇家ともそしることなし。ゑせ歌どもにいたりては、又いづれもよろしからず。中比のさしもなき歌をこの世の歌にならべてみれば、けさうしたる人のなかにあまがほにてまじはるにことならず。今の世のいともよみおほせぬ歌は、或はすべて心えられず、或は悪気はなはだし。されば一方に片執すまじきことにこそ」。(54ウ)

問云、「今の世の体をばあたらしくいできたるやうにおもへるはひがごとにて侍るか」。

答云、「この難はいはれぬこと也。たとひあたらしくいできたりとても、かならずしもわろかるべからず。もろこしには、かりある文体だにも世々にあらたまる也。このくにの小国にて人の心ばせのおろかなるにより、もろ〳〵のことを昔にたがへじとするにてこそ侍れ。まして歌は心ざしをのべ、みゝをよろこばしめむためなれば、ときの人のもてあそびこのまんにすぎたることやは侍るべき。いかにいはんや、さらに〳〵今たくみいでたることにあらず。万葉までは事とをし。古今の歌どもをよくもみわかぬ人の、この難をばし」(55オ)侍るなり。かの集のなかにさま〴〵の体あり。しかあれば、中古のすがたも古今より出たり。この幽玄のさまも此集よりいでたり。たとひ今のすがたをよみつくして又あらたまる世ありとも、ざれごとうたなどまでももらさずえらびのせたれば、なをかの集をばいづべからず。これを一向に耳とをくおもひてそしりいやしむは、ひとへに中比の歌のさまに対せられたる也」。

問云、「このふたつの体、いづれかよみやすく、又秀歌をもえつべき」。

答云、「なかごろの体はまなびやすくして、しかも秀歌はかたかるべし。こと葉ふりて、し」(55ウ)かも風情ばかりを詮とすべきゆへなり。今の体はならひがたくて、よく心えつればよみやすし。そのさまめづらしきにより、すがたと心とにわたりて興あるべきゆへ也」。

問云、「きくがごとくならば、いづれもよきはよし、わろきはわろかなり。学者は又、われも〳〵とあらそふ。いかゞしてその勝劣をばさだむべき」。

答云、「かならず勝劣をさだむべきことかは。たゞいづ方にも、よくよめるをよしとしりてこそは侍らめ。たゞし、寂蓮入道申こと侍き。『このあらそひ、やすくこときるべきやうあり。そのゆへは、手をならふも、「おとりの人の文字はまねびやすく、われ」(56オ)よりあがりざまの人の手跡はならひにすることかたし」といへり。しかあれば、「われらがよむやうによめ」といはんには、季経卿・顕昭法師などいへる、案ずともえこそよまざらめ、われ

はかの人々のよむやうには、たゞふでさしぬらしていとよくかきてん。さてこそ事はきらめ』とぞ申されし。人のことはしらず、身にとりては、中比の人々あまたさしあつまりて侍し会につらなりて、人の歌どもをきゝしには、わがおもひいたらぬ風情はいとすくなかりき。わがつゞけたりつるよりはこれはよかりけり、などおぼゆることこそありしかど、いさゝかも心のめぐらぬことはありがたくなん侍し。しかあるを、」(56ウ) 御所の御会につかうまつりしには、ふつと思ひもよらぬことをのみ人ごとによまれしかば、このみちははやくそこもなく、きはもなきことになりにけりと、おそろしくこそおぼえ侍しか。されば、いかにもこの体を心うる事は、骨法ある人の、さかひにいり、たうげをこえてのちあるべきことなり。それすらなを、しはづせばきゝにくきことおほかり。いはんや、風情たらぬ人の、いまだみねまでのぼりつかずしてをしはかりにまねびたる、かたはらいたきことなし。けさうをばすべき事としりて、あやしのしづのめなどが、心にまかせて物どもぬりつけにたらんやうにぞおぼえ侍し。かやうのたぐひは」(57オ) われとはえつくりたてず、人のよみすてたること葉をひろひて、そのさまをまねぶばかり也。いはゆる『露さびて』『風ふけて』『心のおく』『あはれのそこ』『月の在明』『風のゆふ暮』『春のふるさと』など、はじめめづらしくよめる時こそあれ、ふたゝびともなれば念もなきことぐせどもをぞわづかにまねぶめる。あるは又、おぼつかなく心こもりてよまんとするほどに、はてにはみづからもえ心えず、たがはぬ又無心所着になりぬ。かやうの歌、幽玄のさかひにはあらず。げにだるまとも、これらぞいふべき」。

問云、「ことのおもむきはおろ〳〵心え侍りにたり。その幽玄とかいふらん体にいたりてこそ、いかなるべし」(57ウ) とも心えがたく侍れ。そのやうをうけたまはらん」といふ。

答云、「すべて歌、口伝・髄悩などにも、かたき事どもをば手をとりてをしふばかりに尺したれど、すがたにいたりてたしかにみえたる事なし。いはんや幽玄の体、まづ名をきくよりまどひぬべし。みづからもいと心えぬことなれば、さだかにいかに申べしともおぼえ侍らねど、よくさかひにいれる人々の申されしおもむきは、詮はたゞことばにあらはれぬ余情、すがたにみえぬ景気なるべし。心にもことはりふかく、詞にも艶きはまりぬれば、これらの徳はをのづからそなはるにこそ。たとへば、秋のゆふぐれのそらのけしきは、色もなく声も」(58オ) なし。いづくにいかなるゆへあるべしともおぼえねど、すゞろに涙こぼるゝがごとし。これを心なきつらの物は、さらにいみじとおもはず。たゞめにみゆる花・紅葉をぞめで侍。又、よき女のうらめしきことあれど、詞

にあらはさずふかくしのびたるけしきを、さよとほの〻〳〵みつけたるは、ことばをつくしてうらみ、袖をしぼりてみせんよりも、こゝろぐるしうあはれふかゝるべきがごとし。これ又、おさなきものなどは、こま〻〳〵といはずよりほかに、いかでかけしきをみてしらん。すなはち、このふたつのたとへにて、風情すくなく心あさからん人のさとりがたきことをばしりぬべし。又、おさな」(58ウ)き子のらうたきが、かたことしてそこともきこえぬこといひゐたるは、はかなきに心つけてもいとおしく、きゝ所あるにたることも侍にや。是らをばいかでかたやすくまねびもし、さだかにいひもあらはさむ、たゞみづから心うべきこと也。又、きりのたえまより秋の山をながむれば、みゆる所はほのかなれど、おくゆかしく、いかばかりもみぢわたりておもしろからんと、かぎりなくをしはからるゝおもかげは、ほと〳〵さだかにみんにもすぐれたるべし。すべては心ざし詞にあらはれ、月を『くまなし』といひ、花を『たへなり』とほめむことは、なにかはかたからん。いづくかは、歌のたゞ物いふにまさる徳とせん。ひと」(59オ)ことばにおほくのことはりをこめ、あらはさずしてふかき心ざしをつくし、みぬ世のことをおもかげにうかべ、いやしきをかりて優をあらはし、をろかなるやうにてたへなる詞をきはむればこそ、心もをよばずことばもたらぬ時、これにておもひをのべ、わづかに三十一字がうちにあめつちをうごかす徳をぐし、おに神をなごむる術にては侍れ」。

〔俊恵定歌体事〕

俊恵云、「よのつねのよき歌は、たとへばかたもんのをり物のごとし。よく艶すぐれぬる歌は、うき紋のをり物などをみるがごとく、そらに景気のうかべる也。」(59ウ)

ほの〻〳〵とあかしの浦のあさぎりにしまがくれゆくふねをし
ぞおもふ

月やあらぬ春やむかしのはるならぬわが身ひとつはもとの身
にして

これこそは余情うちにこもり、景気そらにうかびて侍れ。又、させる風情もなけれど、詞よくつゞけつれば、をのづからすがたにかざられて、この徳をぐすることもあるべし。むくのかみの歌に、

うづらなくまのゝ入江のはまかぜにおばななみよる秋のゆふ
ぐれ

これもたがはぬうきもんに侍るべし。

たゞし、よきことばをつゞけたれど、わざともとめ」(60オ)たるやうになりぬるをば又失とすべし。ある人の歌に、

月さゆるこほりのうへにあられふり心くだくるたま河のさと

これは、たとへば石をたつる人の、よき石をえすへずして、ちひ

さき石どもをとりあつめて、たゞさしあはせつゝたてたれど、いかにもまことのおほきなるいしにはおとれるやうに、わざとびたるが失にて侍る也」。

又云、「匡房卿歌に、

しら雲とみゆるにしるしみよしのゝよしのゝ山の花ざかりかも

これこそはよき歌の本とはおぼえ侍れ。させる秀句もなく、かざれることばもなけれど、すがた」（60ウ）うるはしくきよげにいひくだして、たけたかく、とをしろきなり。たとへば、しろき色のことなるにほひもなけれど、もろ〳〵の色にすぐれたるがごとし。よろづのことはまりてかしこきは、あはくすさまじきなり。この体はやすきやうにてきはめてかたし。ひともじもたがひなば、あやしのこしおれになりぬべし。いかにもさかひにいらずしてよみいでがたきさまなり」。

又云、

「こゝろあらむ人にみせばや津の国のなにはわたりの春のけしきを

是ははじめの歌のやうにかぎりなくとを」（61オ）しろくなどはあらねど、いふふかくたをよかなり。たとへば、能書のかけるかなのしもじなどのごとし。させる点をばくはへ、ふでをふるへる所もなけれど、たゞやすらかにことすくなにて、しかもたへなる也」。

又云、

「おもひかねいもがりゆけば冬の夜の河風さむみ千どりなくなり

この歌ばかりおもかげあるたぐひはなし。『六月廿六日の寛算が日も、これをだに詠ずればさむくなる』とぞ、ある人は申侍りし。おほかた、いふなる心・こと葉なれども、わざともとめたるやうにみゆるは、歌にとりて失とすべし。」（61ウ）たゞ、むすばぬみねのこずゑ、そめぬ野べの草葉、はる秋につけて花のいろ〳〵をあらはすがごとく、をのづからよりくることをやすらかにいへるやうなるが秀歌にて侍るなり」。

歌には故実の体といふことあり。よき風情をおもひえぬとき、心のたくみにてつくりたつべきやうをならふ也。

一には、させる事なけれど、たゞこと葉つゞきにほひふかくいひながしつれば、よろしくきこゆ。

風のをとに秋のよふかくねざめしてみはてぬ夢のなごりをぞおもふ

一には、古歌のことばのわりなきをとりておか」（62オ）しくいひなせる、又おかし。

わがせこをかたまつよひのあき風はおぎのうはゞをよきてふ

かなむ

かり人のあさふす野べの草わかみかくろひかねてきゞすなくなり

又、きゝよからぬことばをおもしろくつゞけなせる、わざとも秀句となる。

はりまなるしかまにそむるあながちに人を恋しとおもふころかな

おもひ草はすゑにむすぶ白露のたま〳〵きては手にもたまらず

一には、秀句なれど、たゞこと葉づかひおもし」（62ウ）ろくつゞけつれば、又み所あり。

あさてほすあづまをとめのかやむしろしきしのびてもすごすころかな

あしのやのしづはたおびのかたむすび心やすくもうちとくるかな

今ははやあまのとわたる月のふねまたむら雲にしまがくれすな

〔取名所様〕

一には、名所をとる故実あり。国々の歌枕、かずもしらずおほかれど、その歌のすがたにしたがひてよむべきところある也。たとへば、山水をつくるに、松をうふべき所には岩をたて、池をほり、花をさかすべき地には山をつき、眺望をなす[が]」（63オ）ごとく、その所の名によりて歌のすがたをかざ[る]べし。是らいみじき口伝なり。もし歌のすがたと名所とかきあはずなりぬれば、ことたがひたるやうにて、いみじき風情あれど、やぶれてきこゆる也。

よそにのみみてやゝみなむかづらきのたかまの山のみねのしら雲

ともしするみやぎがはらのした露に花ずり衣かはくまぞなき

あづまぢを朝たちくればかつしかやまのゝつぎはしかすみわたれり

ゆふされば野辺の秋風身にしみてうづらなくなりふかくさのさと」（63ウ）

はじめの歌は、すがたきよげにとをしろければ、たかまの山ことにかなひてきこゆ。ともしの歌、ことばづかひやさしければ、みやぎがはらにおもひよれり。あづまぢの歌、わりなくおもふ所ある体なれば、かつしかまのゝつぎはし、さもときこゆ。秋風の歌、物さびしきすがたなるにより、ふかくさの里ことにたよりあり。つくしてかくべからず。これらにて心えつべし。

〔新古歌〕

一には、古歌をとる事、又やうあり。ふるき歌のなかに、おかしき詞の歌にたちいれてかざりとなりぬべきをとりて、わりなくつゞくべき也。た」(64オ) とへば、

夏かあきかとへどしら玉いはねよりはなれておつるたにがはの水

これら体なり。しかあるを、古歌をぬすむは一の故実とばかりしりて、よきあしきことばをもみわかず、みだりにとりてあやしげにつゞけたる、くちおしきこと也。いかにもあらはにとるべし。ほのかくしたるはいとわろし。

又、ふる歌にとりてことなる秀句をばとるべからず。なにとなくかくろへたることばの、おかしくとりなしつべきをみはからふにあるなり。ある人、「そらにしられぬ雪ぞふりける」といふふることをとりて、月の歌に、」(64ウ)「水にしられぬこほり也けり」とよめりしをば、「これぞまことのぬすみよ。さるほどなるなましんみやうの、きぬゝすみて小袖になしてきたるやうになんおぼゆ」とこそ人申侍りしかば、又、御所の御歌合に、暁の鹿をよみ侍しとき、

今こんとつまや契りしなが月のありあけの月にをじかなくなり

この歌は、「ことがらやさし」とてかちにき。されど、さだいへのあそん当座にてなんぜられき。「かのそせがわづかに二句こそはかはりて侍れ。かやうにおほくにたる歌はその句をゝきかへて、かみの句をしもになしなどつくりあらためたるこそよけれ。」(65オ) これはたゞもとのをき所にて、むねの句と結句とばかりかはれるはなんとすべし」となん侍し。

〈仮名筆〉

古人云、「かなに物かくことは、歌の序は古今のかなの序を本とす。日記はおほかゞみのことざまをならふ。和歌のことばは伊勢物語ならびに後撰の歌のこと葉をまねぶ。物がたりは源氏にすぎたる物はなし。みなこれらをおもはへてかくべきなり。いづれも〳〵かまへてまなの詞をかゝじとするなり。心のをよぶかぎりはいかにもやはらげかきて、ちからなき所はかなにてかく。それにとりて、はねたるもじ、入声の文字のかきにくきなどをば、すてゝかくなり。」(65ウ) 万葉には新羅をば『しら』とかけり。古今の序には喜撰をば『きせ』とかく。これらみなその証也。ことばのかざりをもとめて対をこのむべからず。わづかによりくる所ばかりをかくなり。対をしげくかきつれば真名にゝて、仮名のほいにはあらず。これはわろき時のこと也。かの古今の序に、『花になくうぐひす、水にすむかはづ』などやうに、えさらぬ所ばかりをのづからいろへたるがめでたき也。こと葉のつゞでといふ

は、『すがのねのながき夜』とも、『こゆるぎのいそぎて』とも、『いそのかみふりぬる』などいふやうなることを、あるひはふるきをとり、あるひはめづらしくたくみなるやうにとりなすべ」(66オ)し」。

勝命云、「かなに物かく事は、清輔いみじき上手也。なかにも初度の影供の日記、いとおかしくかけり。『花のもとにははなのまら人きたり、かきのもとにかきのもとのゑいをかけたり』とあるほど、なにことにみゆ。かなのたいはかやうにかくべきぞ」。

〔諸浪名〕

なみの名はあまたあり。のりつな入道がいひけるとて人のかたりしは、「『おなみ』『さなみ』『さゝらなみ』『はう の てかへし』『はまならし』といふ、みなこれ波の名なり」といひけれど、いかなるをしかいふと、わきてはいはざりけり。是はその国のその所にとりていふことにて侍るにや。歌などはいともみをよび侍らず。顕昭に」(66ゥ)とひ侍りしかば、「『さなみ』『さゞなみ』『さゝらなみ』といふ事あり。これはみなちひさき波の名也。ことばの広略なれば、時にしたがひてもちゐるなり」と申侍しを、つくしのしまとゝいふ所にかよふものゝ、ことのつゐでにかたり侍しは、「つくしにとりてみなみのかた、おほすみ・さつまのほど、いづれの国とかやわすれたり、おほきなるみなと侍り。そこには、四月・五月にはあけくれ波たちて、しづまるまもなし。四月にたつをば『うなみ』といひ、五月にたつをば『さなみ』となん申侍れ」といひき。う月、さ月といふゆへにや、いとけふあること也。」(67オ)

〔アサリ・イサリノ差別〕

或人云、「『あさり』といひ、『いさり』といふは、おなじこと也。それにとりて、あしたにするをば『あさり』となづけ、ゆふべにするをば『いさり』といへり。東のあまの口伏也」云々。まことにけふあること也。

〔五日カツミヲフク事〕

或人云、「橘為仲、みちの国のかみにてくだりたりけるとき、五月五日家ごとにこもをふきければ、あやしくてこれをとふ。その時、庁官云、『この国には昔よりけふさうぶゝくと云ことをしらず。しかあるを、故中将のみたちの御時、「けふはあや め ふく物を。たづねてふけ」と侍ければ、この国にはさうぶなきよしを申侍りけり。その時、「さら ば 」(67ゥ)あさかのぬまの花かつみといふ物あらん、それをふけ」と侍しより、かくふきそめて侍る也』とぞいひける。中将のみたちといふは、さねかたの朝臣也。

〔為仲ミヤギノ、萩ヲホリテノボル事〕

この為仲、任はてゝのぼりける時、みやぎ野ゝ萩をほりとりて、

ながびつ十二合に入てもてのぼりければ、人あまねくきゝて、京へいりける日は、二条のおほぢにこれをみ物にして人おほくあつまりて、車などもあまたたてりける」とぞ。

〔頼実ガスキノ事〕

左衛門尉蔵人頼実は、いみじきすきもの也。和歌に心ざしふかくて、「五年が命をたてまつ」(68オ)らん。秀歌よませ給へ」と住吉にいのり申けり。そのゝち、年へておもきやまひをうけたりけるとき、命いくべきいのりどもしける時、家にありける女にすみよしの明神つき給て、「かねていのり申事をばわすれたるか。

木葉ちるやどはきゝわくことぞなき時雨する夜もしぐれせぬよも

といへる秀歌よませしは、なんぢが信をいたしてわれに心ざし申しゆへなり。されば、このたびはいかにもいくまじき也」とぞおほせられける。

〔業平モトゞリキラルゝ事〕

或人云、「業平朝臣、二条のきさきのいまだたゞ人に」(68ウ)おはしましけるとき、ぬすみとりてゆきけるに、せうとたちにとりかへされたるよしいへり。この事、又日本記式ニあり。ことざまはかの物語にいへるがごとくなるにとりて、むばひかへしけるとき、せうとたち、そのいきどをりをやすめがたくて、業平朝臣のもとゞりをきりてけり。しかあれど、たがためにもよからぬことなれば、人もしらず、心ひ[と][つ]にのみ思ひてすぎけるに、業平朝臣、『かみおほさん』とてこもりてゐたりけるほどに、歌まくらどもみむと、すきにことよせてあづまのかたへゆきにけり。みちの国にいたりて、かそしまといふ所にやどりたりけるに、野のなかに歌のかみの句を」(69オ)詠ずるこゑあり。そのことばに云、

秋かぜのふくにつけてもあなめ〳〵

といふ。あやしくおぼえて、声をたづねつゝこれをもとむるに、さらに人なし。たゞ死人のかしらひとつあり。あくるあしたになをこれをみるに、かのどくろのめのあなより、すゝきなんひともとおひ出たりける。そのすゝきの風になびくをとのかくきこえければ、あやしくおぼえてあたりの人にこのことをとふ。或人かたりて云、『をのゝこまちこの国にくだりて、此所にして命をはりにけり。すなはちかのかしらこれなり』と云。こゝに業平、あはれにかなしくおぼえければ、[な][み]」(69ウ)[翻刻者注、以下別筆]だをゝさへて下の句をつけゝけり。

をのとはいはじすゝきおいたり

とぞつけゝる。其野をば玉つくりの小野といひける」とぞ侍る。たまつくりの小まちと小野小町とおなじ人歟あらぬ人かと、ひと

〻おぼつかなき事に申てあらそひ侍りし時、ひとのかたりし也。

〔とこねの事〕

或人云、「ある歌合に五月雨のうたに、『こやのとこねもうきぬべき哉』とよめり。しかあるを、清輔朝臣判者に、『「とこね」といふことき丶よからず』とて、まけたり。此道のはかせなれども、この事こゝろをとりなむせらるゝ。

たけちかくよどこねはせじうぐひすのなく声きけばあさゐせられず」(70オ)

とよめり。この歌をおぼえざるにや」と云云。

この難はなはだつたなし。すべて和歌の体を心得ざる也。そのゆへは、歌のならひ、世にしたがひてもちひるすがたありと賞することば有。しかあれば、古集の歌とてみなめでたしとあふぐべからず。されば、古集を軽しめるにもあらず。時の風のことなるが故也。しかあれば、古集の中にさま〻のすがた・言葉、一偏ならず。其中に、いまの世の風にかなへるをみはからひて、本として、かつはその体をならひ、かつはそのことばをぬすむべきなり。彼後撰の歌、此ごろならば撰集に入べくもあらず。まづ、題を賞せざるは歌のおほきなる失也。おぼろけの秀逸にあらざれば、是をゆるさず。次に、「よどこねはせじ」といひ、「あさゐせられ」(70ウ)ず」といへるすがた・ことばよろしからず。しかあるを、「よどこね」といへるさしもなきことばをとりて、なを「よ」の字を略して「とこね」といへる、誠にことやうなることばなり。是を後撰の威をかりてひがなむと思へるは、よくこのみちにくらき也。」(71オ)

右此一帖ハ飛鳥井栄雅卿筆也」(裏見返し)

〔付記〕本稿は、平成二十二年度科学研究費補助金による研究成果の一部です。貴重な蔵書の閲覧と翻刻を快くお許しくださったノートルダム清心女子大学当局に厚くお礼申し上げます。